ダイバーシティ編

技能者不足を喫緊の課題としている溶接事業所では、近年、人材の多様化が進んでいる。例えば「高齢となった溶接士の再雇用」「外国人技能者の採用」「女性溶接士の活躍」など。高齢になり現場を離れた溶接士は、「現役時代に習熟させた技能」を若手社員に伝承するために腕をふるうことができる。言語の壁があっても、外国人技能者には技能取得に積極的な人材が多い。従来、力仕事とされてきた工場作業だが、ジグ・工具の進化で女性技能者が活躍する場面は格段に増加している。本特集は、そんなダイバーシティ経営が進む溶接事業所で活躍する3人の溶接士から話を聞いた。

溶接女子

クリエイティブワークス（東京・江戸川区）
中村翠さん

学ぶ・作る・教えるサイクルで上達
溶接の魅力を伝え恩返し

溶接を行う中村さん

東京都溶接協会が開催する2021年度東京都溶接技能コンクール学生の部で優勝し、その後、クリエイティブワークス（東京・江戸川区）で溶接士として勤務しながら、城東職業能力開発センター（同）溶接科の講師として数多くの溶接士を輩出し続けている中村翠さん。初めて溶接トーチを握ってから2年間とは思えない速度で活躍の幅を広げている中村さんだが、「最初は仕事が決まらずに溶接士になるのを諦めかけていた」という。そんな中村さんに当時を振り返ってもらい、駆け抜けてきた2年間の話を聞いた。

◇　◇

子育てが落ち着いてきた21年頃、私は落ち込んでいた。溶接職は人手不足のため100％近い就職率であると聞いていたが、仕事がなかなか決まらなかったからだ。城東職業能力開発センター溶接科で、ともに溶接技能を学んできた仲間が次々と仕事を見つける中で、「パートタイム」を希望していた私を採用してくれる溶接事業所の少なさには舌を巻いた。そのため、クリエイティブワークスに溶接士として入社できたことで、多くの可能性を頂いたことに、とても感謝している。

当社では3―5㍉の鋼を溶接することで、子供の遊具や、学校備品などを成形すること多い。工場が決して広いわけではないため、数十人が製造ライン上に並んで作業する大手事業所と違い、目の届く範囲でお互いが作業し、個々がカバーし合える規模感ため、「子供が熱を出した」「保育園が休み」といった事情を上長に相談しながら、パートタイムでも働くことができている。

当社での溶接作業で特に気をつけているのが、ひずみだ。遊具や学校備品は板厚が異なる鋼製を溶接して製造しているものが多く、実際に公園や学校で使用されるため、強度を担保しなければいけない。それには、板厚の異なる二つの鋼板を接合するだけではなく、しっかりと入熱して溶融させることが求められる。一方で、入熱すればするだけ、ひずみが発生するため、一定量溶接したら、逆側から同じように溶接することでひずみを打ち消し合うといった工夫が重要となり、「構造と現象の理解」が欠かせない。最終的に叩いて形状を整えることも多いため、一つの構造物でありながら工程が多いのが難所といえるだろう。

また、当社は溶接事業所の規模としては小規模だが、「溶接塾」という形態で、溶接を覚えたい企業・個人を対象に、溶接技能を指導している。実際に溶接構造物を制作しながら、溶接技能指導を繰り返すといった特殊な環境で私は溶接作業を覚えていった。覚えた溶接技能を、しっかりと言語化し、生徒に指導するというサイクルを繰り返すうちに、いつしか私自身の溶接技術も上達していることに気づくことができた。

私は22年5月から、当社の業務である溶接士としての作業、塾の運用に加えて、城東職業能力開発センターで溶接の講師を引き受けることになった。私自身が溶接士としてのキャリアが長いとは言えないため、しっかりと溶接の魅力を学生に伝えていくには、より高いレベルの溶接士でありたい。今後も、習う、実践する、人に教えるというサイクルの中で、技能を磨いていくつもりだ。

溶接士になってからというもの、子供と一緒に公園に行くと、「この遊具はなかなか上手に溶接されているね」などと子供が溶接部を見つけては報告してくれるようになった。

今後も、大きなビルや、自動車、ロケット、子供が日々触れる遊具など、自由自在にものづくりを行うことができる溶接が、誇りある仕事だと胸を張れるように腕を磨きたい。また、腕を磨くことで、溶接士としてのキャリアを開いてくれた、当社に恩返しをしていきたい。